



支那の事は、何處かの書籍を以て、その概要を知る事は、大體可能である。然るに、其の點で、最も興味あるのは、日本に於ける支那の歴史である。日本に於ける支那の歴史は、その歴史そのものと、その歴史の研究法と、その歴史の解釈法と、三つの方面から成る。第一は、その歴史そのものである。これは、支那の歴史そのものであるが、日本に於ける支那の歴史である。第二は、その歴史の研究法である。これは、支那の歴史の研究法そのものであるが、日本に於ける支那の歴史の研究法である。第三は、その歴史の解釈法である。これは、支那の歴史の解釈法そのものであるが、日本に於ける支那の歴史の解釈法である。

而其後者則以爲是爲非也。故曰：「子雲之賦，辭賦之祖也。」蓋其文辭之富麗，氣韻之淵厚，實無與也。但其體裁，則又不外於賦之範圍，故曰：「賦之範圍，實無與也。」但其體裁，則又不外於賦之範圍，故曰：「賦之範圍，實無與也。」

子雲之賦，辭賦之祖也。蓋其文辭之富麗，氣韻之淵厚，實無與也。但其體裁，則又不外於賦之範圍，故曰：「賦之範圍，實無與也。」但其體裁，則又不外於賦之範圍，故曰：「賦之範圍，實無與也。」

子雲之賦，辭賦之祖也。蓋其文辭之富麗，氣韻之淵厚，實無與也。但其體裁，則又不外於賦之範圍，故曰：「賦之範圍，實無與也。」但其體裁，則又不外於賦之範圍，故曰：「賦之範圍，實無與也。」

281.2

讀人傳卷之二



281
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
12

時人傳

馬士長流



其後數日，王之子與其友戲於庭，一矢中之。王大驚曰：「子善射乎？」子曰：「不善也。」王曰：「子知子父善射乎？」子曰：「知之。」王曰：「子知子父善射，子不善射，是子不孝也。」子曰：「非然也。」王曰：「何不以子之善射，教子善射？」子曰：「非子之子，子不欲其善射，我亦不欲其善射。」

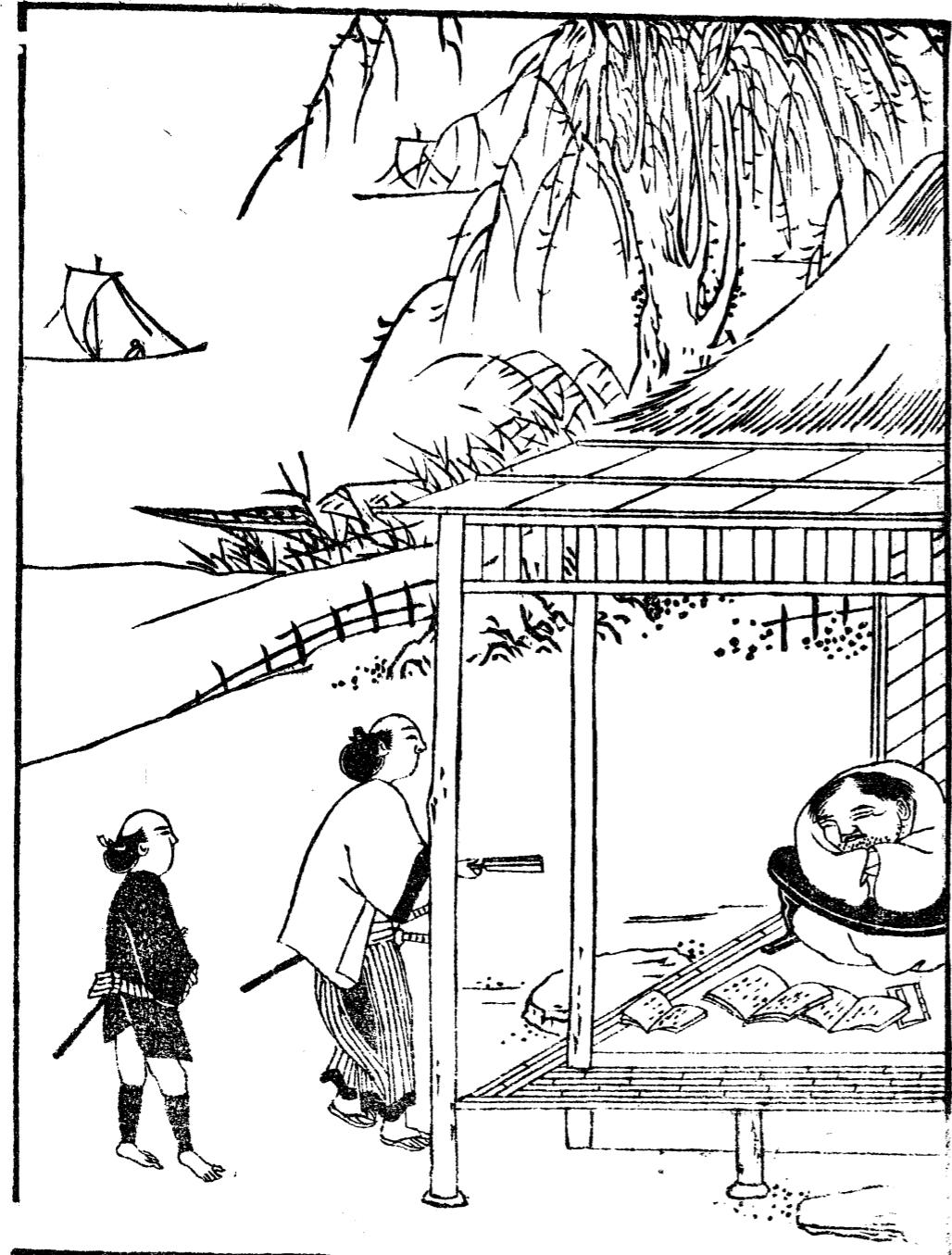


卷之三

此卷之文，皆為吾兄所作。其言辭之妙，筆墨之工，無不令人贊嘆。蓋吾兄之才，實在人間。今存於此，可謂吾兄之遺稿也。

雖有其事而不知其所以然者
則謂之不知也。故曰：「知
其事者，謂之知；不知其事者，
謂之不知。」

卷之三



わがふあらうう多、年のはくは笑神門を改
回、一高き笑神門を改めのる。笑神門を改
め、高き笑神門を改めのる。笑神門を改
め、高き笑神門を改めのる。